2012年
6月12日
火曜日

弔いの儀式を考える

野村宗訓　教授（経済政策）

① 生と死をつなぐ納棺師

山形県を舞台にした映画『おくりびと』で、「納棺師」という仕事がクローズアップされました。管弦楽団でチェロ奏者をしていた主人公はリストラに直面し、再就職を試みる中で、「やすらかな旅のお手伝い」という広告にひかれ、葬儀社で修業を積んでいくというシナリオです。

原作にあたるのは、青木新門さんの小説『納棺夫日記』で、作者自身の実体験をベースにしたシリアスな内容ですが、映画は別作品としてコミカルな描写も取り込んでいます。両方に共通するメッセージは、「人間は生き物の死の上にしか、生を享受できない」という点です。

② 生死の区切りとしての儀式

お葬式は結婚式と同様、ビジネスとして成り立っています。生前葬として、本人主導のパーティにすることもできます。近年、お墓は少子化の影響から都心部を中心に、森林葬や樹木葬といったメンテナンス・フリーの形態も出てきました。お葬式ではなく、医学の発展を願って、大学病院に献体する人もいます。地味なクロージングですが、最期の社会貢献としての儀式と解釈できます。

「冥途」という表現は暗いイメージですが、英語の「ネクスト・ワールド」は明るい未来を感じます。ベトナムでは死者もあの世でお金がいるからと、儀式用のお札を燃やす習慣があります。悲しいことですが、東日本大震災の被災地ではお葬式ができていないケースが多く、親戚はもちろんのこと、突然の死に直面した周囲の人達も、心の整理ができていないのが実情です。

③ 「中陰・中有（ちゅうう）」という世界

仏教では、「三途の川」が生死の境界と言われます。大病を患った人から、まどろむような夢うつつ状態が続いた、と聞いたことがあります。自分は朦朧（もうろう）としているために、喋れないけれども、周りの声は聴こえるとのことでした。芥川賞作家で僧侶の玄侑宗久（げんゆうそうきゅう）さんの小説『中陰の花』は、生と死の中間状態である「中陰・中有」をテーマにしています。

福島県在住の玄侑さんは、大震災以降、グリーフ・サポートに力を注ぎ、東北大学で「実践宗教学」という科目を立ち上げ、宗教学者や僧・牧師の連携を図っておられます。亡くなった人も日常を支えている点から、悲しむ場所と時間を共有する弔いの儀式の重みを強調されています。

④ 戦争と震災に向き合う

大林宣彦監督は戦争と震災を重ねて、映画『この空の花　長岡花火物語』を制作しました。長崎と新潟の新聞記者が交流し、死者との会話から命の尊さを語るという設定です。原爆投下候補地だった新潟は、2007年の中越沖地震に遭遇しました。花火で有名な長岡は、開戦時の連合艦隊司令長官・山本五十六（いそろく）の生誕地であり、パンプキン爆弾（原爆と同型の通常爆弾）が投下された町です。

毎年8月に開催される花火大会は、空襲からの復興祈願のみならず鎮魂の儀式と位置付けられています。映画では、空から落ちてくる爆弾を、夜空に輝く花火に替えるという希望が込められているのです。キーワードは「まだ間に合う」。東日本大震災からの回復には時間を要しますが、様々な立場で建設的な行動を継続すれば、平穏な社会に復帰できるということを認識させられました。■